

# 徐龍達先生を称えて

経営学部長 朴 大 栄

徐龍達先生は、2003年3月30日にめでたく70歳のご誕生日・古希をお迎えになります。同時に、誠に残念なことではありますが、勤続40年の永きにわたる桃山学院大学での学生生活においても定年をお迎えになります。

先生は、1957年に大阪市立大学商学部を卒業後、神戸大学大学院経営学研究科に学び、博士課程を単位取得された後、1963年4月、桃山学院大学経済学部専任講師として赴任され、会計学原理、簿記、演習をご担当になられました。その後、経営学部の創設と同時に経営学部教授に移籍され、経営学部長に就任されたのは41才という若さでありました。1993年4月の大学院経営学研究科修士課程の創設にも尽力され、続く1999年4月博士課程開設により、大学院講義・演習科目も担当されることとなりました。この間、フランクフルト大学の客員教授にも迎えられ、ドイツ会計学を中心に数多くの業績を発表されるとともに、学生、院生に対しては公私にわたって非常に熱心な指導を行ってこられました。その親身な姿勢は、1969年の創設以来長く続いている徐ゼミ同窓会組織「桃龍会」の存在を見ても明らかであります。

先生は、学内行政の面でも多大の貢献を果たされてきました。70年代の大学紛争など激動の時代に、学生部次長、経営学部長、図書館長、人権委員長、評議員などの要職を歴任されるとともに、30数年前からアジア関係講座の開設、韓国の大学との交流に努力されてきました。長年にわたる国際交流の発展は、韓国啓明大学校の申一熙総長に対する「桃山学院大学名誉学位」第1号の贈呈となって結実しました。

徐龍達先生の40年にわたる研究・教育・行政のご功績に報いるため、桃山

学院大学は「桃山学院大学名誉教授」の称号を贈るとともに、経営学部と経済・経営学会は、ここに「徐龍達教授退任記念号」を刊行、献呈することとなりました。

先生は、たんに“象牙の塔”にこもる研究者ではありません。日本の国際化、定住外国人との多文化共生社会の確立を目指して、幅広い著作活動とともに広く市民活動でもオピニオン・リーダーとしての本領を発揮されました。

先生は、韓国釜山市で生をうけ、戦時の最中、わずか9歳にして渡日を余儀なくされました。その後、先生が歩んで来られた年月は、まさに波乱万丈の人生であります。先生は、道理を重視され、それに反するものについては、いかに困難な問題であっても黙認を潔しとせず、解決のため率先躬行の労を惜しまれることはありません。先生の歩む先には多くの閉ざされた扉がありました。同じ土地に住む人々の間の共生社会、その実現に向けて、一つ一つの扉を明け放つまで、息の長い活動を続けられてきたのです。

先生が新聞・マスコミに取り上げられた回数は、おそらく本学随一でありましょう。国公立大学「外国人教育任用法」の制定、定住外国人の地方参政権獲得運動の推進といった市民活動の実践は、日本政府が推進している衆議院・参議院の憲法調査会の公聴会に、定住外国人としてはじめて公述人に選ばれるほどのインパクトを与えてきました。定年とはいえ、このように掛け替えのない先生が退職されることはまことに残念でなりません。

徐龍達先生、本学をご退職されましても、今後とも末永くご健勝にて、市民社会における益々のご活躍を期待いたしますとともに、後進に対しましては変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。